

毘沙門堂門跡



上) 京都でも屈指の紅葉の名所として有名。昨年は、JRキャンペーン「そうだ京都に行こう」の舞台となり多くの観光客で賑わった。
左下) 伝教大師御作とされる本尊は秘仏。写真は前立本尊。
右下) 宸殿へ続く勅使門前の参道。元禄年間に移築された総門は、陛下の行幸、門跡の住職の晋山式の以外は閉門されている。

毘沙門堂の起源は、天武天皇の御願により、大宝三年(七〇三)、行基菩薩によって開かれたのがはじまりとされる。桓武天皇の御持仏であった毘沙門天(すなわち伝教大師最澄上人から献上された仏像)が奉られ、人々からは「毘沙門さん」と親しく信仰を集めてきた。藤原定家が歌に愛でるほどの桜の名所でもあったが、惜しくも洛中の戦火にまかれて焼失。何度かの衰退と復興を繰り返してきたが、第一〇七代陽成天皇の命により現在の京都府山科の地に再建(一六六五年)され、公弁法親王が入寺されてより、門跡寺院となった。

ご本尊は、伝教大師最澄上人御作の秘仏・毘沙門天。地理的には山科盆地の北端の山裾に位置し、清閑な佇まいである。祈祷寺としても有名である。また紅葉の季節には多くの観光客で賑わう。

毘沙門堂門跡

住所：京都市山科区安朱稲荷18
拝観時間：8：30～17：00 (冬季は16：30まで)
拝観料金：一般500円
詳しくは、HP (<http://bishamon.or.jp/>) をご覧下さい。

お知らせ

▼新年初祈祷のご案内

大晦日に新年初祈願法要を行います。新しい年の厄除・開運祈願をご希望の方は、お早めにお申し込み下さい。
【日時】十二月三十一日 二十三日五十分、除夜の鐘 二十四時、祈願法要
※冥加料二千円(一祈願)、祈祷木札を授与。



▼新年のご挨拶にお伺い致します
本年もよろしくお願ひ申します

▼【逝去】今井長夫氏。当院檀徒総代総務として、二十四年に亘り寺院の護持発展に力を尽くされた。謹んで哀悼の意を表します。

▼慈覚大師のムック本

慈覚大師の御遠忌に合わせて天台宗と比叡山で作成されたPR本です。書店で発売中。



信越教区一隅大会開催

平成24年10月26日 (金)

信越教区一隅を照らす運動大会が立科町の慧日山修學院津金寺にて開催された。宗教評論家の「ひろさちや」氏の講演があり、県内各所から集まった檀信徒ら約350名が参加した。



ひろさちや氏の講演

去る十月二十六日、立科町津金寺にて平成二十四年度「信越教区一隅を照らす運動大会」が開催された。「一隅

を照らす運動」とは、伝教大師のお言葉「一隅を照らすこれすなわち国宝なり」の精神を世の中に敷衍するために始められた運動である。今大会では、宗教評論家の

「ひろさちや」氏による『八万四千の光』と題した講演があり、約三五〇名の檀信徒らが熱心に耳を傾けた。ひろさちや氏は、東京大学で稀代の仏教学者・中村元氏のもとで仏教学を学び、卒業後は大学で教鞭を執りながら、「ひろさちや」のペンネームで多くの仏教の入

門書を執筆。仏教を一般の人々に、身近なものとして紹介してきた。講演では、ひろ氏のユーモアある軽妙な語り口に誘われて、会場からは笑いが起きるなど、終始和やかな雰囲気であった。ひろ氏は「天台宗の根本経典である『法華経』には、諸法実相」という言葉がある。それを伝教大師は「一隅を照らすこれ即ち国宝なり」と表現された。つまり、一人ひとり、個性や違いがあるが、それぞれの存在が尊いもので、何一つとして切り捨てられないべきものではない。誰もが宝物のように尊い」と講演された。当院からも、檀信徒が参加した。

七五三のお参り

平成24年11月15日 (木)

健やかな成長と幸せを祈って、園児ら120名が来山



健やかな成長を祈り

去る十一月十五日、毎年恒例の七五三参りに、野辺山保育園と南牧保育園から約一二〇名の園児らが、当院を

訪れ、健やかな成長や幸せをお祈りした。七五三参りは、一般的には男の子は三歳と五歳、女の子は三歳と七歳の十一月一日に、成長を祝って神社・寺などに詣でる行事で、もとは関東圏で盛んであったものが、全国的に普及したものとされている。七五三を祝う意味としては諸説あるが、三歳は言葉、五歳は知恵、七歳は歯を神様から授かることを感謝するということや、子供の厄祓いとされることもある。園児たちは行儀よく本堂の中で正座して、法要中もしっかりと合掌していた。住職から園児全員に飴などと記念の品が送られた。



醫王院時報

発行所：海尻山醫王院寺務所
〒384-1301 長野県南佐久郡南牧村海尻528
電話：0267-96-2631
Eメール：iouin@dia.janis.or.jp



慈覚大師開基・信濃神光寺跡にて回向法要を厳修

慈覚大師円仁1150年大遠忌に合わせて



↑ 神光寺歴代住職の墓と寺院跡、奥に松尾芭蕉の句碑がある(右)、神光寺跡の入り口にある磨崖仏(左上)、三重塔跡の礎石。三重塔は明治三年に佐久市前山・貞祥寺に売却された(左下)。



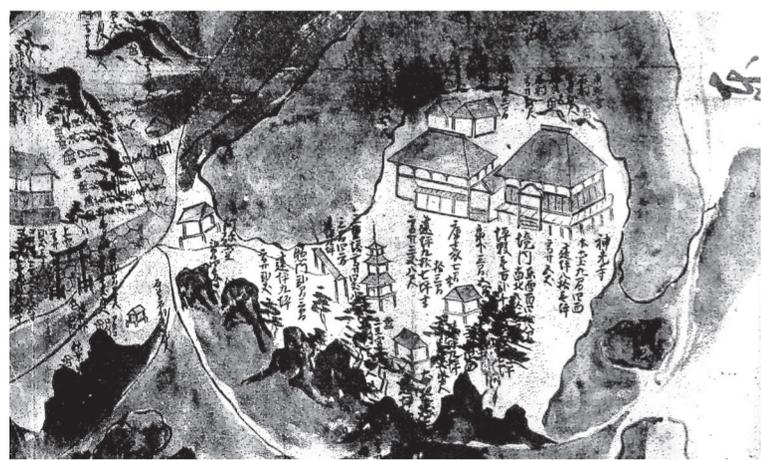
平成二十四年十一月二十四日、檀信徒会の要望から、かつて当院の本寺であった藤島山清浄院神光寺跡において、神光寺歴代住職及び檀信徒の追悼回向法要が厳修された。

歴代住職の菩提追善の為に

来年は、慈覚大師・円仁の御遠忌一五〇年の年にあたる。慈覚大師創建と伝えられる藤島山清浄院神光寺において、歴代住職と檀信徒の回向法要が厳修された。檀徒会にて、当院の本寺について見学したいとの要望があり、慈覚大師の遠忌に合わせて企画されたもの。慈覚大師円仁(七九四～八六二)は、下野(現在の栃木県壬生町)出身。宗祖である伝教大師・最澄上人の弟子である。最後の遣唐使船に乗船し入唐、多くの経書を請来した。帰国後は、東国を巡く

とともに、延暦寺の発展にその力を尽くした。その著『入唐求法巡礼行記』は、円仁の九年にも及ぶ入唐中の日記であり、マルコポーロの『東方見聞録』、玄奘三蔵法師の『大唐西域記』と共に世界三大旅行記として高く評価されている。当院の本寺である津金寺には、その写本があったとされる「幻の津金寺本」と呼ばれている。法要には、史跡を管理されている藤島氏にも列席いただいた。神光寺の史跡は、松原の長湖に突き出た半島に位置し、歴代住職の墓や開山塔、磨崖仏、三重塔の礎石などが残存している(写真)。当院では新たに神光寺歴代住職位牌を造立、開眼した。

* 『四明餘霞』第三二九号・附録(二一九四)



↑ 松原上下諏訪社及神光寺絵図：本堂・庫裏・惣門・三重塔・阿弥陀堂・本地堂などの伽藍を有する佐久地方南部における一大霊場であった。

藤島山清浄院神光寺

藤島山清浄院神光寺は、天長三年(八二六)、慈覚大師円仁の開基と伝えられ、神光寺の名のとおり神と仏が互いに融和し、ともに信仰の対象とされる神仏習合の寺院であった。

甲斐武將の武田信玄の篤い帰依をうけた松原諏訪神社の別当寺として、また当院をはじめとする五ヶ寺の本寺として、佐久地方南部の信仰の中心であったという。

しかし、江戸から明治に亘る四度の法難によって徐々にその力を失い、さらに明治の法難(廃仏毀釈)で、壊滅的な打撃をうけた。本堂、観音堂、本地堂などは維持することはできず、幕末の名宮大工・小林源蔵の手による三重塔も、佐久市前山の貞祥寺(曹洞宗)に売却された。大般若經六百巻、諸仏具等の什宝物も寺を離れ、廃寺となった。

神光寺の第七九世住職・光俊は、僧侶の職を辞することを決意。明治二年藤島一學と改名し、神職となった。

本尊『薬師瑠璃光如来』は、八那池の秀光寺を経て、当院へ遷座された。『過去帳』は、神光寺総代であった海尻の井出與吾惣氏が預かり、当院へ移された。本地仏である普賢菩薩(上諏訪社)、千手観音(下諏訪社)は、稲子の弥勒寺に預けられたとされるが、その後不明である。

現在、寺址には諸堂の礎石や宝篋印塔、石仏、歴代住職の墓のみが残る。人々のよりにどころとなっていた往事の姿を垣間見ることができる。